

ジェンダーから見た狩猟採集社会

今村 薫

1. フェミニスト人類学と狩猟採集社会

1960年代のフェミニズム⁽¹⁾運動の台頭と連動して、人類学においても女性の視点からの研究がなされるようになった。このようなフェミニスト人類学とは、ただ単に「対象社会の女性について研究したもの」でもなければ、「女性人類学者による研究」を意味するわけでもない。人類学一般が、異文化の記述を通して他者の「差異」を弁別する方法を採求してきたその学説史と軌を一にするように、フェミニスト人類学は「他者としての女性」を課題の中心に据えてきたのである。

そこへ至るまでの視線は、幾重ものフィルターを屈折しつつ通過しなければならない。第1にフェミニスト人類学者は、自文化と自己の学問原理の内部で「他者」であり、第2に「他者」としての異文化を観察し、さらに第3に対象文化の中での「他者」である女性を調査するのである。すなわち、他者を認識する構造そのものを問題にするという点で、フェミニスト人類学は一種の「認識革命(上野, 1986: 88)」なのである。

女性視点からの文化批判を試みた人類学者たちの当初の課題は、男女の社会的地位の通文化比較だった。「伝統的社会」における女性の地位、男性と女性の非対称的な諸関係等について刺激的な議論がなされるようになり、男女の社会的地位の優劣に強い問題意識を持った人類学者たちは、あらゆる社会の人類学的資料を収集、分析してきた。しかし、皮肉なことに、彼/彼女た

ちが真摯な論考の末にたどり着いた結論は「いかなる既知の文化においても、女性は男性よりある程度劣っているとみなされている(Ortner, 1974: 69)」というものであった。

この「男性優位の普遍性」を受けて、次なる課題はこの現象の原因を社会構造に探るということに移っていった。そして、なぜ通文化的に男性が優位な位置を占めるのかという問題に関するさまざまな説が提出された。その一つが「男性=狩猟者説 Man the hunter theory」である。この説によると、男性の優位性は、初期人類が狩猟採集をおこなっていたころの性的分業に起因するという。「男性は狩猟、女性は採集」という性的分業自体は、優劣を含まない対称的なものであるが、これが何故に優劣差に結びつくのであろうか。

まず、この説によれば、性的分業は女性が出産・育児を負担するという生物学的な違いに依拠するという。そして、性的分業により男女の活動領域が分断され、本来中立であった生産物に価値の差異が生じてくる。女性が採集した食物は家族内で消費されるのに対し、男性が獲得した肉は共同体全体に分配される。女性の関心は子どもと家庭という「私領域」にとどまるが、男性は「公領域」を志向する。そして、このことこそが、社会・経済という文脈において男性が優位になることを保証しているのである。

以上のような「男性=狩猟者説」について、私が研究対象としてきたブッシュマン社会を例に、批判的に検討を加えたい。本稿においてい

くつかの矛盾や反証を指摘することになるが、この説の決定的な致命傷は「私領域」と「公領域」という概念を対立させて論を組み立てていることである。本稿では、分配などの相互交渉（トランザクション）を分析することによって「公私」の本質を再考する。その結果、「私領域」あるいは、「家庭」という概念そのものが、西欧社会が近代において創出したきわめて特殊なものであることが示されるであろう。

2. 人類進化論へのジェンダー・バイアス

アフリカ、オーストラリア、極地方などで現在も生きる狩猟採集社会については、先進諸国の「文明人」の都合でさまざまに語られてきた。それは、狩猟採集民は、文明にとりのこされた野蛮で劣った人々であるという蔑視から、平和で平等主義を実現させた理想社会といった見方まで、語る側の幻想を一方的に投げかけられたものであった。また、人類の進化や社会制度の起源を考える際に、たびたび現存する狩猟採集社会が引き合いに出されてきた。

20世紀なかば、サルからヒトへという人類の進化がようやく事実として定着するようになると、狩猟活動が人類の進化を押し進めたという「狩猟仮説」がまっさきに主張された。狩猟のために武器や道具を使うことが、人類の道具製作や直立二足歩行、脳の大化などの進化をもたらしたというのである。この仮説において狩猟をおこなう者は当然男性であり、人類の半分を占める女性が何をしていたかについては誰も想像しようとしなかった。

1960年代にはいって、狩猟採集民が実際にどのように暮らしているのかという研究が盛んになり、「Man the hunter」という画期的な論文集が出版された（R. Lee and I. Devore, 1968）。この中でLeeたちは、狩猟採集民の食生

活において、植物性食物が動物性のものよりずっと重要であることを指摘したが、しかし、本全体としては男性がおこなう狩猟活動に焦点が置かれていた。また、題名の「man」が、「人間」というよりも「男性」を意味していることから判るように、当時の狩猟採集民の研究は男性中心の視点に偏ったものであった。

その後、フェミニスト人類学者たちによる「Woman the gatherer」（Dahlberg, 1981）が出版され、女性が人類の進化に重要な役割を担ったという「採集仮説」が展開された。女性たちが集団で採集に出かけ、食物をキャンプで待つ子どもたちに与えるために持ち帰るようになったのが、ヒトへの道の第一歩である。植物の根を利用するための掘り棒や、採集物を運ぶための蔓性のネットや籠の運搬具が、人類最初の道具であった。自力で母親につかまらぬことのできない人間の赤ん坊もまた、紐や籠などで運搬されたにちがいない。

この仮説が強調する点は、「キャンプで分配するために運搬する」ということであり、男性がキャンプへ肉を持ち帰るようになったのは、これが習慣として定着したのちのことであるという。

これまでの狩猟仮説は遺跡で発見される石器を根拠にしてきたが、採集仮説で強調される運搬道具は、いずれも朽ちやすく遺跡に残らない。採集仮説はそうした自説の不利な点を指摘しつつ、現在の民族資料などを使いながら女性からの視点を主張したのである。

このように、人類の進化についての理論も、どちらのジェンダーから見るかによって展望が大きく変わってくる。

3. 性的分業の根拠

ところで、男性中心主義の「狩猟仮説」にた

いして、フェミニスト人類学者たちは「採集仮説」を提示して女性の重要性を主張したのだが、この主張により、「男は狩猟、女は採集」という性的分業のイメージがかえって強調される結果となった。

そして、性的分業は生物学的に根拠のあることであり、このような差異が男女の位階差に結びつき、「男性優位」は人類に普遍的な現象であると考える人々は以下のように説を展開している。

第1に女性の出産機能と男性の運動能力という肉体的な差異により、性的分業が始まった。子どもを産み、母乳を与えて育てるという行為は女性にしかできないことであり、この出産と授乳のために女性は行動圏が狭められ、ベースキャンプの近くで木の実や果実、野草などを採集するにとどまった。一方、男性は広い範囲を動き回り、すぐれた運動能力でもって野生動物を倒し、その肉を女・子どものいるベースキャンプまで持ち帰り分け与えた。性的分業の根本原因は、女性の生殖機能という「生物学的宿命 (biology is destiny) (Sacks, 1979)」にあるのである。

第2に性的分業により男女の領域が分断され、しかも男性の活動が社会的に重要なものとなる。女性が採集した食物は家族と世帯だけにふりむけられるのに対し、狩猟は共同体のメンバーとして男性に課せられた責任であり、獲物は共同体全体に分配される。女性の生活の多くは出産、育児のために費やされ、女性の活動と関心は家庭内領域におさまるが、男性は「家庭外」の社会において活動を行う。このような性別役割は、女性の「家庭内 domestic」志向と男性の「公的 public」志向という一つの対立の図式に結びつけることができる (Rosaldo, 1974: 17-18)。

その結果、社会・文化・経済体系において男性が価値あるものとして位置づけられ、女性は劣位におかれる。それぞれの生産物を比べても、堅果や根菜類などの女性の採集物は栄養価が高く、食生活全体に占める割合が7~8割に達するにもかかわらず、肉だけが「本物の食べ物」と語られ、肉は採集物よりも価値が高いという (アボリジニの例として、Kaberry, 1939年; ブッシュマンの例は田中, 1971年)。

これまでみてきたように「男性=狩猟者説」は、男性の優位性は性的分業から導き出され、性的分業は生物学な性差に由来すると主張する。そして、現代社会の男女の関係もまた、原始の狩猟採集時代から続いてきた性的分業を受け継ぐものであるという。

たとえば、「男は仕事、女は家庭」という現代社会の性別役割分業について、しばしば次のようにいってこれを養護する人がいる。このような分業は太古の昔から行われてきたことである。現在の狩猟採集民は、社会的分業や社会的階級がもっとも少ない社会であるが、この社会においてさえ、「男は狩猟、女は採集」という性的分業が見られる。人類の祖先も、男は妻子を養うために遠くまで狩りに出かけ、女はベース・キャンプの近くで育児と家事に専念しながら片手間に採集もおこなっていたのだ。これは、きわめて「自然な」ことなのである、と。

4. 性的分業は絶対か?

アフリカ南部に住むグイ/ガナ・ブッシュマン⁽²⁾(以下、ブッシュマンと略す)は、以前はカラハリ砂漠を遊動しながら自給的な狩猟採集生活を送っていた。1979年にボツワナ政府が井戸を設置し、さらに食料を配給し始めると、ブッシュマンたちは遊動生活をやめて井戸のまわりで定住するようになった。私が調査を始めた

1988年には、井戸のあるカデ地域は、小学校、クリニック、いくつかの政府の出先機関などが整った集落になっていた。そのころ、カデの住民は定住はしていたものの、住まいの形態は伝統的なキャンプと同じだった。つまり、血縁などで結ばれた複数の家族が集まって1つのキャンプを作り、夫婦と未婚の子どもという核家族ごとに小屋を建てていた。人々は、カデ地区の自分の好むところにキャンプを設置し、キャンプのすぐ後ろにはブッシュが控えていた。ともに住むキャンプのメンバーは頻繁に入れ代わり、数年に1度はキャンプを丸ごと移動させていた。

食生活において、政府が配給するトウモロコシ粉が主食になっていたが、狩猟で得た肉は、定住以前と同じ程度に食べられ(Osaki, 1984)、採集食物は以前の5分の1程度に減ったものの確実に採集されていた(今村, 1992年)。煮炊きが必要な定住生活にともなって、薪は以前にも増して欠かせないものとなった。しかし、集落周辺の植物は取り尽くされてしまい、女性たちは毎日遠くまで薪や食物を集めに出かけていた。

さて、いよいよ「男性＝狩猟者説」の検証にうつろう。第1点の「女性はその生殖機能により、採集活動しかできない」というのは、まったく間違いである。採集物の中には、カメや芋虫、駝鳥の卵などの動物性のもも含まれているが、それ以外にも、女性が正真正銘の狩猟をおこなうことがある。犬を連れて採集や狩りに行く女性がいるし、罠を仕掛けて鳥や小型の動物を捕まえていた女性の話はよく耳にした。また、女性たちが採集の途中に動物の足跡を追跡したり、動物を発見したことをキャンプにもどって男性に知らせることもある。女性たち自身が、ダイカーを掘り棒で殴ってつかまえよう

としていた現場を目撃したこともある。ただし、女性が狩猟をおこなう頻度は男性よりも少なく、定住してからは女性が狩猟をおこなう機会はさらに減った。

他の民族をみてもみると、アフリカの熱帯雨林に住むムブティ・ピグミーは、男女が共同でネット・ハンティングをおこなうことが知られており(市川, 1982)、アボリジンの女性が犬を使って小型動物とカンガルーを狩猟する例(Rohrlich-Leavitt, Sykes and Weatherford, 1975)、女性が本格的に狩猟に加わるフィリピンのアグタの例も報告されている(Estioko-Griffin and Griffin, 1981)。

採集活動の方に注目すると、これは決して楽な作業ではない。日常的に20キロを超える採集物を背負って、往復10キロ以上の砂道を歩かなければならない。ときには泊まりがけで遠方まで採集に行く。キャンプに残っている時も、まわりの植物を観察したり人々と会話をかわすことによって、今どこで何が実っているかという事前の情報を綿密に収集している。そして、いったん採集に行く決めたら数人のグループで出発する。採集は「家庭内」で、家事の片手間にやれるような仕事ではないのである。

男性もまた採集をおこなう。騎馬猟などで1ヶ月以上キャンプを離れるときは、当然男たちは自分で食物や薪を集めて自炊する。キャンプの近くに仕掛けた罠を見回りに行ったときにも、男性がスイカなどを採集してキャンプに持ち帰ることがある。夫婦で採集に行くこともある。また、定住以降は、薪採集や水汲みは女性だけでなく男性の仕事にもなっている。いずれにせよ、ブッシュマンの社会では、誰もが生きるために必要なことはひと通りこなすことができる「オールラウンド・プレーヤー」でなければならない。初老の男性が、ある怠け者の若者

を評して「大人の男のくせに、料理の仕方也不知道」といった言葉が、印象深く私の心に残っている。

性的分業が「生物学的宿命」であるという主張への最後の反証として、女性は妊娠と出産という生殖機能にのみ彼女の人生を費やしているわけではないことを指摘したい。出産の直前まで採集などの生産活動に従事しているのは、「ブッシュの中で子どもを生む」という彼女たちの経験談から明らかである。出産後も数週間の産褥期を除いては、乳飲み子を背負って採集に出ている。1~2歳になると、一緒にキャンプの大人たちや、兄姉たちに子守りを任せて母親は出掛けることができる。また、父親も育児に参加し、キャンプで皮なめしの作業をしながら子どもたちを傍らで遊ばせたり、子どもを肩にのせて知人を訪問しているといった光景はよく見られる。「実際、多くの狩猟採集社会では、おそらく余暇時間が大量にあるために、女性の諸活動は母親としての役割から大きな制約を受けないのである (Dahlberg, 1981: 21)。」

これまでの検証から、ブッシュマンの性的分業とは、両性での重なり部分が大きいものであること確認しておきたい。彼らの社会は、「女性は狩猟をしてはいけない」というような禁止によって互いの活動を排他的に固定しているのではない。女性は、月経⁽³⁾、妊娠、出産、授乳という生理的条件によって行動を決定的に制限されているわけでもない。また、「男性が狩猟で妻子を養う」ために分業がおこなわれているわけでもない。この最後の点について、これから詳しく考えてみよう。

5. 私領域と公領域

分業起源説の第2点は、女性は家族のためだけに食物を採集するのにたいし、男性はキャン

プのメンバー全員のために狩猟をおこない、男女で生産活動の目的が異なるということであった。そして、この志向するものの違いによって、女性は家庭という「私領域」に、男性は社会的に重要な「公領域」に活動の場が分化する。私領域に生きる女性と子どもは、男性の援助なしには社会の中で生きていくことはできない。

ブッシュマンの社会では、ゲムスボックやエランドなどの大型獣の肉は、キャンプのすべての人々に分け与えられる (田中, 1971: 142)。この肉 (生肉、もしくは干し肉) は、狩猟に参加した数人の間でおこなわれる一次分配、それぞれの家族の身近な親戚に配られる二次分配というルールに沿っておこなわれる「義務的な分配」で大まかに数家族に分けられる。この分配は、ルールに沿って自動的におこなわれるので、肉の所有者である男性の裁量権はむしろ小さい。そして、このあとに、義務というよりは個人どうしの関係によって肉が分けられる。このようなやりとりを私はとくに「自発的な供与」とよんでいる。最終的にキャンプ全体に肉がゆきわたるのは、肉を所有する個人 (男性、女性の両方ありうる) の自発的な分け与えによるところが大きいのである。

罨でつかまえたブッシュグイカーなどの中型・小型の動物は、原則的には家庭内だけで消費される。ただし、たまたま食事の場に居合わせた訪問客や、肉の臭いをかぎつけて集まってきた若者たちには料理された肉が提供される。

女性たちが採集してきた食物は、そのまま分配されるということはまずない。しかし、数人が集めてきた野草や果実、メロンを一緒にして共同で料理をすることはよくあることである。また、肉であれ、採集食物であれ、配給されたトウモロコシであれ、いったん料理されたものは、実に頻繁に多くの人々に分け与えられる。

私が観察したある女性は、自分たちの食事の3回に1回は別の女性から分けてもらい、また、自分が料理したものは家族以外に多いときで18人、平均でも5人に配っていた(今村, 1993)。この供与は自発的なものであり、具体的な親しさやつき合い方の基盤となる。

ここまで私は、ルールに沿った「義務的な分配」と、個人間の関係に基づいた「自発的な供与」を対比させて示した。「義務的な分配」は、大型獣の肉の一・二次分配だけに当てはまるものであり、それ以外のすべての物のやりとりは、男女とも「自発的な供与」によっておこなわれる。とくに、女性同士の頻繁な料理のやりとりが、結果的にキャンプ全体に食物を行き渡らせたり、さらにキャンプを越えた人間関係のネットワークを築く礎となっていることを強調しておきたい。

次に、ブッシュマン社会において「公領域」と「私領域」とは具体的に何を指すのかを考えるために、まず、「キャンプ」と「家族(世帯)」の関係を整理しよう。人類学の大きな課題である家族の起源については、ほとんど必ずといっていいほど性的分業から説明がなされてきた。出産や育児のせいで食物を集めに行けない女性とその子どものために、男性が狩りで得た肉をキャンプまで運び、食料を分配したのが家族の始まりである。女性は面倒見のよい男性を配偶者を選び、男性は自分の遺伝子を受け継ぐ子どもだけに食物を分け与えたい。したがって、男性は生まれた子どもの「父親」として家族を保護し食物を供給するかわりに、ある女性との性交渉を独占するようになったという(Fisher, 1982など)。

ブッシュマンの場合、女性は夫がいなくてもキャンプのメンバーから肉を分けてもらうことができる。また、女性が出産後に小屋に引きこ

もる際も、実際に食事を作ってくれたり薪を取ってきてくれるのは他の女性たちであり、夫が助けてくれなければ母子が飢え死にするというものでもない。男性の側にたっても、妻がいなくても他人の食事の場に参加さえすれば料理を提供される。人々が生きていくには、共同体であるキャンプこそが必要なのである。一対の男女からなる家庭はかならずしも生存に必要なものではない。もちろん、家庭や家族というのが現として存在し、生活の拠り所であることは確かであるが、家庭を自己完結的な経済単位とみなすことには異議をとない。

「キャンプ」を「公領域」に相当させることはできるかもしれないが、はたして「私領域」がブッシュマンの社会にはあるのだろうか。食物をめぐる「分配」と「自発的な供与」は家庭を越えてキャンプ全体、あるいはキャンプを越えて人と人をつないでいる。核家族から構成される「家庭」はキャンプに向かって常に開かれているので、「家庭」を「私領域」に当てはめることはできない。そもそもプライバシーという私的空間がほとんどない(今村, 1998b: 63-64)ので、ブッシュマン社会には私領域が存在しないとさえいえる。ひるがえって考えるに、「家庭」や「私領域」を「公」に対立させるといふ発想自体が、近代西欧社会を基準にした特殊なものなのである。

6. 男性優位の普遍性

現代の狩猟採集社会においても、どちらかというとなりの方が優位であろう。男性が狩りで得る肉の方が、女性が採集してきた食物より価値が高いとされているからである。女性の採集物が食生活において重要な役割を果たすにもかかわらず、どうしてこうなるのかを突き詰めて考えれば、肉の価値の高さは肉そのものにある

のではなく、社会が「そう決めた」からとしか言い得ようがないことに気づく。

フェミニズム理論を援用するというならば、「男は自分のやる事を「男の仕事」と定義し、それを集合的に組織し、威信を付与（上野，1986）」するから、男性は「優位」で肉は価値が高いのである。男性は男性同士で集まりやすく、その集まりを自分たちで「政治的なもの」と定義し、女性を男性の集まりから排除したので、男性は政治や社会的権威という文脈の中では優位に立つのである。

これをブッシュマンの社会に照らし合わせると、確かに男性は「法廷」と称する男性の政治的な場に集合する。この「法廷」は、近隣のバンツ系農牧民であるツワナ・カラハリからもたらされた制度であるが、ブッシュマン社会は古くからこれを取り入れていた。「ヤギ泥棒」などの問題が生じると、男性のうちでも年長者を中心に法廷が開かれ、鞭打ち等の処罰が決定されていたようである。

また、彼らの言説においても、「月経中の女性が弓矢に触れると、狩人の腕が死んでしまって不猟になる⁽⁴⁾（今村，1998 a：76）」、「空からふりそそぐ邪悪な細片はまず女性のからだに突き刺さり、そこからキャンプ中に災厄が広がっていく（Silberbauer，1981：54；菅原，1993：150）」など、女性を邪悪なものともみなす男性中心的イデオロギーが垣間みられる。

しかし、このような男性優位のイデオロギーが意識されることは少ない。先ほどの「法廷」にしても開かれることはまれで、日常的な問題はキャンプのあちこちでの「集まり」で話し合われる。その集まりは、男性だけのこともあれば、女性だけのこともあり、また、男女が小さな木陰に身を寄せ合って共通の話題を熱心に語り合うこともある。その話題には、「ある夫婦の

愛人問題で、まわりの人が困惑している」「妻に先立たれた男が赤ん坊の育児で窮乏している」といった親族会議に近いものから、「ライオンが集落に接近してロバを襲っている」「政府が集落まるごと移住するよう強要している」という政治的決断を迫るものまで多岐にわたる。これらの問題について、男性も女性も自由に自分の考えを主張する。大袈裟な身ぶりを入れながら、女性が皆の前で演説することも珍しくない。

女性のリーダーシップはキャンプの移動の際にも発揮される。植物分布が移動先を決定する（田中，1971）ので、ベースキャンプを定めるにあたり、狩猟のための動物分布より採集のための植物分布が優先されるのである。定住するようになってからは、このように日常的に移動生活を繰り返すこともなくなったが、政府が配給を止めた1990年に一度だけ、彼らがブッシュの中でキャンプ生活をおくっているところに出くわしたことがある。このとき、採集物を取り尽くしたとって女性たちが移動を主張し、実際にキャンプを数キロ移動させた。

Ortnerが指摘しているように、ある社会で男女のどちらが優位であるかを論ずるとき、レベルを区別して考えなければならぬだろう。それは、その社会のイデオロギーとして、どちらを優位と考えているかというレベルと、実際の場で観察できる具体的な男性と女性の社会交渉というレベルである（Ortner，1974：68）。

イデオロギーというレベルで優劣を検討するならば、「法廷」という制度や、男性中心的な言説が存在するという点で、ブッシュマン社会の男性は女性より優位に立つと結論せざるをえない。しかし、イデオロギー上の優劣が問題になるのは、実際の生活場面のごくわずかである。以下に、具体的な社会交渉のレベルでの男性と女性の関係を見ていくことにする。

7. 具体的な社会交渉におけるジェンダー

グイ/ガナ・ブッシュマンの日常生活での男女の関係は、「対等」であるという印象を受ける。女性だからといって男性に遠慮したり、自分の行動を抑制することもない。女性たちは口論ではもちろん男性と対等にやりあうし、人々を前に自分の考えをはっきり述べる。男性の暴力や、尊大にふるまうカラハリの男の仕打ちにも負けてはいない。たとえば北村(1987)は、男性の理不尽な行為に敢然と立ち向かうブッシュマンの女性を描写している。そこでは、井戸端でカラハリの男に突き飛ばされても何度でも起きあがり、水を汲もうとする若い女性、夫の暴力に猛然と立ち向かう妻、男性の遊び半分の「いじめ」に全身で抵抗する少女などが描かれている。以下は、夫婦の喧嘩の引用である。

「夫の方が近づいて行って、後ろから妻の頭をげんこつで強く押しつけるようになぐりつける。妻の方も反撃して、夫に組みつき腕にかじりつこうとしたが、夫はそれを突きとばし、妻は地面にころげてしまう。妻はそれでもひるまず、立ち上がって反撃しようとした…(後略)」

その妻は実は妊娠中であつたのだが、それでも夫に突き飛ばされ、また、夫に組みついていたのである。その女性が無謀ともいえる果敢さで立ち向かったのにくらべ、まわりの人々が静観しているのは対称的である。人々は二人のやりとりを視界に入れて気にはしているものの、なかなか介入しようとはしない。

このような場面には私もたびたび直面したことがあり、「被害者」である女性を助けなければとやきもきしたり、まわりの人々が手助けしないことを不思議に感じたものである。しかし、女性だから弱くて被害者であり、手を差し伸べて助けてやらなければならないという考えもまた、日本人である私のジェンダー観の投影であ

ろう。ブッシュマンの社会では女性が劣位という観念が稀薄であり、女性は自分に降りかかった理不尽な行為に対しては、自らの決定をよりどころに毅然と立ち向かうのである。

また、女性の闊達さを支えているのは、一見役立たずに見えた観衆であることを指摘しておく。例にあげた夫婦の喧嘩は、もしもこれがプライベートの発達した社会の家の中でおこなわれたのなら、夫による妻への「家庭内暴力」へと変貌しうる性質のものである。それを思うと、ブッシュマンの、とりわけ女性たちが常に人目にさらされていることは、深刻な暴力から彼女たちを守ることになるのである。

8. 国家権力という暴力

現代に生きるグイ/ガナ・ブッシュマンは、「近代化」の大波を2回被った。最初は1979年に始まった定住化であり、2回目は1997年5月にボツワナ政府によって強行された集落まるごとの移住であった。彼らの集落カデが動物保護区の中にあるという理由で、保護区の外へ追い出されたのである。

私は、ニューカデと称する新しい定住地に移住の8カ月後に訪問した。何より驚いたのは、裸の砂地の上に整然と区画された宅地ができあがっていたことであつた。以前のように、複数の家族が集まって1つのキャンプを形成することもなければ、丸く円を描いて建てられた小屋々々が円の中心に向けて戸口を開けているということもなかった。針金をめぐらした長方形の1区画に1世帯の小屋が無機的に建っていた。敷地の角に立てられた水色の小さな塔が、墓標のように道に沿って連なっていた。どうやら、これが番地のようである。

この区画のせいで、人々が互いの住居を訪問し合い、木陰でおしゃべりに時間を費やすとい

うこともめっきり減った。キャンプという空間が地上にもはや存在しなくなったのに、人々は誰と分かち合い、誰とともに生きていくというのだらう。

ボツワナ政府は、ニューカデの住民すべてを対象に登録作業をすすめていた。住民登録には番地と姓名が必要である。姓にあたるものをグイ/ガナはもっておらず、ツワナ(ボツワナの多数派をしめるバンツ系農牧民。カラハリはツワナの1グループ)の慣行に従って父の名を子どもの姓にあてていた。

早勉援助として始まった食料配給は、今度は「最貧民」への福祉政策の一環として継続されることになった。この配給の方は、母親を中心に、母親から子どもたち(成人であっても)へと行き渡るように名簿が作成されていた。役人という外部の者にとって、母親から子どもをたどる方が父親からたどるより確実なのである。

この強制移住によって、グイ/ガナ・ブッシュマンの男女の関係が大きく変わるかどうかは、今のところ断定できない。ただ、自然環境の貧弱な場所に移住させられたせいもあり、女性による食物採集は低調である。現金収入に結びつく仕事に就く機会は男女ともに少ないが、その中でも女性の就職は少ない。

定住化が両性関係にもたらす影響について、クン・ブッシュマンを対象に考察した Draper によると、定住により家庭を中心とした私領域が出現し、男女が公領域と私領域に分断され、男女の位階差も広がったという。クン・ブッシュマンの社会でも、もともと「私領域」に相当するものが存在しなかったのだが、定住により、女性のみが限られた空間で暮らすようになり、料理や小屋の修理など家庭の周辺でおこなう雑事を引き受けるようになった。一方、男性は家庭からは遠い存在になり、バンツ系民族と頻

繁に接触し、権威や社会性を担って女性や家庭の「所有者」となっていく (Draper, 1975)。

グイ/ガナ・ブッシュマンの場合も、プロットの角に集まって、「この移住に関して何を政府に訴えるか」という政治的問題を盛んに話し合っていたのは、男性だけであった。また、政府公認の「法廷」に集まって意見を述べる人間は、男性、それもツワナ語を話せる男性に限られてきているようだ。女性たちは、陰ではツワナ/カラハリの口まねをしておもしろ半分につワナ語で話すことがあるが、なぜか人前ではツワナ語をしゃべろうとはしない。

狩猟採集社会に国家権力が介入し、狩猟採集という生存の方法だけでなく、キャンプという生活の基盤が根こそぎ破壊されてしまった。ここまで変わるのに20年近くかかったとはいえ、人間の歴史を思えばこれは一瞬の暴力に等しい。現在のグイ/ガナ・ブッシュマンの社会には、ツワナ語を話せる男性、その他の男性、そして女性という新たな階層が急激に形成されつつある。

*この論文は、1999年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。

注

- (1) フェミニズム、あるいは女性学(woman's study)は、ウーマン・リブ(女性解放運動)と連携して女性からの視点に偏っていた。80年代後半から、この偏りに意義が唱えられ男性学も登場している。このころから、どちらの性にもより中立的なジェンダーという用語が好んで使われるようになった。
- (2) グイとガナという2つの言語集団からなる。彼らの言語の違いは方言程度で、彼らどうしは十分に言葉が通じ合い、通婚もおこなう。
- (3) 日本の民俗学で報告されているような「月経小屋」

で隔離されるといったことは全くなく、日常とかわらぬ生活をおくる。

- (4) 日本人が考えるような「ケガレ」の概念や恐れによるものではなく、「月経中の女性が出血しながら普通に歩き回っているように、矢がささった獲物が、出血しながら走って逃げていく」から、月経中の女性が弓矢を触るのを禁ずる。即物的でからつとしたイメージによるものである。

引用文献

- Dahlberg, F. 1981 Introduction, in F. Dahlberg (ed.), *Woman the Gatherer*, Yale Univ. Press, New Haven.
- Estioko-Griffin, A. & Griffin, P. B. 1981 "Woman the Hunter: The Agta," in F. Dahlberg (ed.), *Woman the Gatherer*, Yale Univ. Press.
- Draper, P. 1975 "Kung Women: Contrasts in sexual Egalitarianism in Foraging and Sedentary Contexts," in R. Reiter (ed.), *Toward an Anthropology of Women*, Monthly Review Press, New York.
- Fisher, H. E. 1982 *The Sex Contract: The Evolution of Human Behavior*, William Morrow & Company, New York. 1983『結婚の起源——男と女の関係の人類学』伊沢絃生, 熊田清子訳, どうぶつ社。
- 市川光雄 1985『森の狩猟民』人文書院。
- 今村 薫 1993「サンの協同と分配——女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25。
- 今村 薫 1998 a「グイ・ブッシュマンにおける儀礼と治療」『名古屋学院大学論集(人文・自然科学編)』Vol. 34(2): 43-83。
- 今村 薫 1998 b「人が住まない小屋」佐藤浩司編『住まいをつむぐ』49-70頁, 学芸出版社。
- 今村 薫 1999「グイとガナの民族生殖理論と父性」『名古屋学院大学論集(人文・自然科学編)』Vol. 36(1): 11-20。
- Kaberry, P. 1939 *Aboriginal Women*, Sacred and Profane, London.
- 北村光二 1987「社交としてのパフォーマンス——ブッシュマン社会の事例を手がかりに」, 谷泰編『社会的相互行為の研究』1-28頁, 京都大学人文科学研究所。
- Lee, R. B. and I. Devore, 1968 *Man the Hunter*, Aldine Publishing.
- Ortner, S. B. 1974 Is Female to Male as Nature is to Culture?, in M. Z. Rosaldo & L. Lamphere (eds.), *Woman, Culture, and Society*, Stanford Univ. Press. 1987「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か?」, 山崎カオル監訳『男が文化で女は自然か?』, 83-117頁, 晶文社。
- Osaki, M. 1984 The social influence of change in hunting technique among the Central Kalahari San, *African Study Monographs*, 5: 49-62.
- Rohrlich-Leavitt, R., B. Sykes and E. Weatherford, 1975 Aboriginal women: male-female anthropological perspectives, in R. Reiter (ed.), *Toward an Anthropology of Women*, Monthly Review Press, New York.
- Rosaldo, M. Z. 1974 Woman, Culture, and Society: A Theoretical Overview, in M. Z. Rosaldo & L. Lamphere (eds.), *Woman, Culture, and Society*, Stanford Univ. Press. 1987「女性・文化・社会——理論的概観」山崎カオル監訳『男が文化で女は自然か?』, 135-174頁, 晶文社。
- Sacks, K. 1979 *Sisters and Wives: the Past and Future of sexual equality*, Greenwood Press, Connecticut.
- Silberbauer, G. B. 1981 *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*, Cambridge Univ. Press, London.
- 菅原和孝 1993『身体人類学』河出書房新社。
- 田中二郎 1971『ブッシュマン』思索社。
- 上野千鶴子 1986『女は世界を救えるか』勁草書房。